

菅又厚美作 「友達－大人になっても変わらない」

<前編>

- 木森美里 (夢の中)はるかっば！ 信じらんない！ ひどいよ、はるか。ひどい！
- 山崎はるか キャー！（目を覚ます）…あ、夢か…。まだ5時半…。イヤな夢。
- はるかナレーション わたし、山崎はるかは、青春高校2年生。一応、アイドル歌手。今日もまた、イヤな夢を見た。夢の中でわたしのことを呼んでいたのは、中学2年の時の大親友の、木森美里ちゃん。わたしがまだ芸能人になる前は、とても仲が良くて、何でも話せる最高の友達だった。その美里ちゃんが、なぜわたしの夢の中に出てきて、わたしが嫌がらなければならないのかは、今から2年前のあの出来事が原因なのだ。
- (効果音) (教室のガヤ)
- はるか 美里、わたしらもう中2。そろそろ高校受験の準備とか言われて、イヤね。
- 美里 はるかちゃん。わたしね、歌手になりたいの。
- はるか え！ 歌手って、中森明菜とか、光 GENJI とかの？
- 美里 そう。
- はるか そりゃわたしだって、ニコニコ笑って歌うだけで、すごくお金もらえるなら、そのほうがずっといいけど。
- 美里 わたし、結構自信あるんだ。オーディション受けたのよ、実は。
- はるか ウッソー！ いつ？ 全然話してくれなかったじゃない。
- 美里 今度の日曜日、二次審査なの。付き合ってくれるでしょ？
- はるか …うん、いいよ。
- 美里 やったね。
- はるか 美里。でもさあ、美里は特別成績悪くもないし、スポーツだって人並み。なのにどうして？
- 美里 簡単よ。歌が好き。ただそれだけ。もともと勉強は好きじゃないの。
- はるか (小声で)あ、先生だ。
- 美里 (小声で)じゃ、放課後ね。
- はるか (小声で)うん。
- 男子 起立。礼！ 着席。
- 美里モノローグ 美里、どうすればいい？ 美里の目、自信にあふれてて、ステキだけど。勉強が嫌いなだけで、歌が好きっていうだけで、どうしてそう簡単に自分の人生選んじゃうの？ なんでも人並み以上にこなしてる美里が好き。いつもドンくさいわたしのあこがれ。美里がアイドルになったら、すごくカッコいいような気がする…。だけどわたしは、今の美里が好き。でもやっぱし本当の友達なら、やり

たいこと、応援してあげるべきなのかな？

先生

山崎！ 山崎！

はるか

…え？ あ、は、はい！

先生

何ボーっとしてる！ 気合い入れろ！ 36 ページだぞ！

はるか

はい。(モノローグ)あーあ、またやっちゃった。

(効果音)

(放課後のガヤ、口々に)「部活行こうぜ」「バイバイ」「今日サボろうよ」「さようなら」

美里

はるか、さっき、怒られてんの。

はるか

美里のこと、考えてたの。

美里

おおげさあ。わたしは大丈夫。自信あるって言ってるでしょ。

はるか

そうじゃなくて、自分の人生、いろいろ考えないの？

美里

はるか、わたし、昔からね、バスガイドか歌手になろうって決めてたの。わたしには歌しかないのよ。

はるか

…そう、そうなの。

美里

あんまり深く考え込まないこと！ どうあがいても、日曜日は、面接と曲合わせの審査なんだから。

はるか

うん。

美里

じゃね。日曜日、よろしくね。

ナレーション

そして、日曜日――。

はるか

(モノローグ)美里、平気かな。いつもうまいけど、アガって音、外してないかな。面接って何聞かれるんだろう…。あーあ、どうしてわたしがこんなに胃を痛めなくちゃならないのよお。早く終わんないかな。

あ、美里！ どう？ 大丈夫そう？

美里

うん、バッチリ。6時まで残ってくださいって。結果発表があるらしいよ。

はるか

そう、心配ね。

美里

はるか、ちょっとわたしトイレ行ってくる。もう我慢できない。

はるか

じゃ、ロビーに行ってるね。

田村

あの…。

はるか

あ、はい。

田村

私、AMIレコードの田村と申します。

はるか

はい…？

田村

今年の一押しとしまして、あなたのような、ポワっとした感性の新人をデビューさせたくて、お声をかけさせていただきました。あの、お名前は？

はるか

山崎と申します。

田村

山崎、何さんで？

はるか

山崎はるかです。

田村 はるかさん…。きれいなお名前ですね。そこで、AMI レコードからのデビューですが…。

はるか あの、失礼ですけど、人違いじゃありません？ わたしではなく、木森美里、わたしの友達ですが、美里が、このオーディションを受けに来て、わたしはただの付き合いですよ。

田村 ええ、わたしは先ほどから、あなた方を見させていただいております。しかし、わたしの目には、山崎さん、あなたのほうが、この世界には向いているようです。

はるか わたし？ 歌手?!

田村 ええ。わたしにすべてお任せください。

はるか そんなあ…。

ナレーション 今にして思えば、わたしはこの時、心のどこかで美里を見下していたようだ。オーディションを受け、合格するかどうか分からない審査結果を待つ美里を、哀れにも思っていたに違いない。確かに美里は、わたしより歌はうまい。でも、これだけの人数の集まる場所で、レコード会社の人にスカウトされるということは、ほかのだれよりも自分が優れている、輝いているということだ、などと鼻にかけてもみた。“こんなに手っ取り早く歌手になれるんじゃ、遊び気分でやってみよ”と、あの日、美里の気持ちも考えず、あっさりとオーケーの返事を出してしまった。

美里 はるか、ごめん、ハンカチ貸して！ あ、はるか、どなた？

はるか AMIレコード会社の田村さんよ。

(効果音) (場内放送の前後のイントロ)

場内放送 (エコー)ただいまの二次審査をお受けになった方々は、2階大ホールへお集まりください。

美里 あ、行かなくちゃ。じゃ、はるか、頑張るからね。

はるか う、うん。

田村 じゃ、山崎さん。誓約書を郵送しますので、これに住所と電話番号をお願いします。後日連絡しますが、ご両親の反対などありますと、いろいろ難しいですので、今日これを家に持っていかれて結構ですから、よくご相談ください。

はるか はい、分かりました。

ナレーション わたしの両親が許すはずがないと思っていたのが、思いのほかトントンと話が進み、わたしは今日に至ったのだ。あの日、美里はオーディションに落ちてしまい、しばらく口も聞かなかった。あんなに自信にあふれていた美里が、どこかへ行ってしまったかのようだった。わたしも、自分からはとてもスカウトされたなどと言えず、デビューに向けてのレッスンは、学習塾だとウソをついて通ったのだ。

美里 はるか、わたし、別なオーディションに応募したんだ。今度こそ頑張らないとね。

はるか …う、うん。

美里 何よお、はるか。どうしたの？ わたしより元気ないじゃない。

はるか あのね…。あのね、あ、あの…。やっぱり言えない。

美里 何よお、水臭い。わたしとはるかの仲じゃない。言ってよ。もしかして、「今度も落ちるからやめとけ」って言うんじゃないでしょうねえ。やあよ、わたし、頑張る。絶対合格するもん！

はるか あのね、美里にずっと黙ってたけど、あのオーディションの日、わたし、レコード会社の人にスカウトされたの。

美里 …え？

はるか 美里がね、結果発表を待ってるっていうのに、わたしだけがおいしいところ、持っていったのは、友達として、どんなものなのかなっていろいろ考えたのに…。やっぱりわたしも自分のこと第一に考えてたのね。来年、デビューの予定で今、レッスン中なの。塾って言ってたけど、あれウソなの。ごめん。“話そう、話そう”ってずっと思ってたのよ。でも、ほら、オーディション落ちちゃったでしょ、美里。言いそびれちゃったの。ごめんね。

美里 …。

はるか 美里、怒った？

美里 はるかって信じらんない！ ひどい！ ひどいよお！

はるか あ、待ってよ、待ってよ、美里～！

ナレーション あの日、わたしがどんな思いで打ち明けたかなんて、美里には全く分からなかったに違いない。でも、きっとわたしの心にも、汚れたものがあったのだ。「美里に対しては、何一つ上になるものがないわたしが、初めて上に立つことができ、どうして普通にしていられるって言うの？ そうよ、そう。わたしにはこれくらいしか勝つ手がないのよ。」そう何度も心に言い聞かせた。「自分は悪くない。自身ありげにした美里が勝手に怒って、ひがんだだけ」って思えば思うほど、胸が痛くて…。あれから美里は離れていってしまい、二人の仲は自然消滅。そうこうしているうちに、わたしは東京の事務所の近くのマンションへと、移ってしまったのだ。

もう 2 年半前の出来事なのに、今もはっきりと夢に出てくる。美里への“友達”としての思いは、この夢を見るようになってから、いつしか哀れみに変わっていき、あの楽しかった中学時代の二人には戻れないことがはっきりしてきて、つらさよりも、情けなくなって、思わず涙が出てしまう。

白川マネージャー はるかちゃん。起きてる？ 入るわよ。

はるか あ、おはようございます。

白川 ほらほら、今日から映画のロケでしょ。早く着替えて。もう7時になるわよ。
はるか はい！
ナレーション ほら、やっぱりわたしは芸能人。何時に寝ても、起きても、芸能人。親友とのことすらはっきりできないのに、つらいくせに、それでもやめられないアイドルとしての生活。気がおかしくなりそう…。ダメになりそう！（エコー）

<後編>

(映画のロケーション)

ディレクター あのねえ、もっと感情込めてくれないかなあ！ 遊びじゃないんだよ。
“宏”役俳優 ディレクターにいちいち言われたんじゃないかなわねえな。
ディレクター 何？ 何が言いたんだ？ え？
俳優 はいはい。
ディレクター あのね、アイドルは棒読みでも映画は撮れるの。はるかちゃんはそのままいいんだよ。じゃ、さっきのところ、もう一度。はい、スタート！
宏 夏子、おれ…。
夏子(はるか) もう何も言わないで。わたしは平気。(自分に戻り、感情が爆発して)平気じゃない…。平気じゃない！
ディレクター おいおい。ストップだよ。カットカット！ はるかちゃん、どうしたの？
俳優 おれ、やっぱり合わないのかな。
はるか (泣き出す)ダメ、ダメなの！ わたしなんか、どこかへ行っちゃえばいいの！
ディレクター 困るなあ。マネージャー、かなわないよ。
白川 すみません。少し休憩させてください。はるかちゃん。
はるか ねえ、白川さん。美里が、美里が。
白川 はるかちゃん、何言ってるの？
はるか 美里なら、「自分は歌手だから」って、映画は断ったと思うの。
白川 美里って、中学の時の友達的美里ちゃんのこと？
はるか そう。
白川 なぜはるかちゃんは、その美里ちゃんと自分を比べるの？ はるかちゃんのはるかちゃんじゃない。自分ってものをなくすと、この世界ではやっていけないのよ。ましてや、あなたはデビューして間がないのに。こんなことじゃダメ。
はるか わたし、すごくひどい女なの。こんなところでノホホンとしていられる立場じゃないの。
白川 はるかちゃん。わたし、特別にオフあげる。皆にはわたしからちゃんとごまかしてあげるから、一度、いろんなこと、じっくり整理して考えてごらんよ。何かがつかめるかもしれない。
はるか ありがとう。だけど、美里に会って話するわけでもないのに、何も変わらない

よ。

白川 美里ちゃんとの間にどんなことがあったのかは、いつか、落ち着いたら話してくれれば言い。会いたいなら、会えばいい。ね？

はるか 怖い、すごく。わたしは裏切り者だから…。美里はわたしを憎んでる。だから、2年半もたつのに、まだわたしの夢や心の中に現れて、わたしの気持ちを引き裂くの。怖い。

白川 何も始まらない気がする、今のままじゃ。わたし、合わせてあげる。

はるか 白川さん！

白川 あなたのことは、社長、ご両親、ほかのスタッフ皆から預かってるの。わたしの責任なの、ダメな人間にするのも、しないのも。美里ちゃんへの連絡は、わたしに任せて。中学の時の名簿、コピーで学校から頂いてるから。さ、今日はもう休みなさい。皆には、気分が優れないとでも言っとくから。

はるか はい。

ナレーション 頭の中で、いろんな考えがグルグル回っていた。わたしは、ひょっとしたら、このまま中途半端で消えてしまうかもしれない。気まぐれで、もっと考え方が薄っぺらだったら、どんなに楽か…。そればかり考えてしまう。今は、ベストテンなどの歌番組で、同じころにデビューした歌手に順位を抜かされることよりも、過去を引きずる自分のほうが怖かった。何日間休暇を取ったのだろうか。もう季節は暖かくなっていたが、心は晴れ上がりそうもなかった。
そんなある日――。

白川 さあはるかちゃん。今日は六本木で人に会うよ。

はるか 仕事見つけるの、大変でしょ？ わたしのわがままでごめんね。

白川 全然。わたしは今日は一緒に行きません。あなた一人で十分。今までの自分にけじめをつけて、これからの仕事や生活に新しくテイクオフするために、今日、ここへ行くこと。(地図を渡す)

はるか …カフェバー？

白川 うん。でも、昼一番で会うから、明るい服にきなさいね。じゃわたしは事務所に生きます。はるかちゃん、実はね、あなたの休暇の間、仕事見つけるには戦争だと思ってたの。でも、あなたはやっぱり、何をしてても、どこにいても、スターなの。仕事、余るほど来てるのよ。心配しないで！

はるか 白川さん…。

白川 さ、わたしは行くわよ。

はるか あ、ありがとう。

ナレーション わたしは、地図を頼りに、やっと目指すカフェバーを探し当てた。

(音楽)

はるか あ、ここだ。一番奥のカウンター…。あ！

美里 はるか…。

はるか 美里…。わたし、わたし…。

はるかモノローグ どうしよう。言葉が見つからない。懐かしさの一步手前で、苦い思いばかりが空回りする。どうしたらいい？

美里 はるか。来てくれないと思った。

はるか どうして？

美里 だって、ケンカ別れしたみたいだったじゃない？

はるか 美里、今何してるの？

美里 普通の高校生。彼もできたよ。

はるか そう、よかった。わたしは…。

美里 わたし、気にしてないよ。

はるか え？

美里 はるかに会う前に、マネージャーの白川さんに会ったわ。その時、白川さんはすべて知ってると思ったけど、はるか、何も話してなかったのね。わたしの話聞いて、すごく心配してたわ。だって、今、はるかの力になってくれる人は、白川さんでしょ？ その白川さんに、すべてをぶつけなくじゃダメじゃない。「独りで悩んでたなんて…」って言ってたわ。

はるか そう…。

美里 わたしね、はるかをブラウン管を通して見るたびに、自分でも不思議だけど励みになった。記者会見でも、学校では見られなかったはるかを見ることのできたし。つらくても笑顔のはるか、やつれたはるか、どれもが全部はるかなんだって思うと、ジーンと来た。アイドルタレント山崎はるかとして、十分なほどにわたしたちに夢を与えてくれたよ。そんなこと考えてたら、あの日、はるかのデビューを聞いた日の、わたしの態度って幼稚だったなって思う。今思えば、そのわたしのひと言で、はるかがうんと悩んでいたんだね。本当に情けない。ごめんね。

はるか (泣き声)美里…。

美里 わたしがあん時、はるかに言ったことよく考えてみれば、わたしって、本当にカッコいいこと言ってただけで、本当のところは、歌が好きだから歌手になりたかったんじゃなくて、目立ちたかっただけだったみたい。だから、はるかがスカウトされて、自分はオーディション落ちで、“なぜわたしじゃダメなのよ”みたいにひがんだのよね。本当に歌が好きなら、歌手にならなくたって別に構わないのに。やっぱり子供だったのね。

はるか 美里、そんな風になわたしを見ててくれたのね。わたし、ずっと、ずっとモヤモヤしてたの。わたし…(泣きじゃくる)

美里 はるか、泣かないでよ、もう。こないだね、横浜の外人墓地を歩いてたらね、す

ごくいい言葉見つけたの。なんか、キリスト教の言葉みたいなんだけど、墓石に彫ってあったの。「人がその友のために命を捨てる、これほど大きな愛はない。」

はるか ……どうということかな？

美里 わたしね、近くの教会の人に聞いたの。これはね、もともとはイエス・キリストのことを表してるんだって。イエスがわたしたちのために十字架にかかってくださった、これほどの愛はないってことなんだって。すごいと思った。この言葉知ってから、わたしの心の中、いろいろなわだかまりやら、憎しみがあつたけど、なんてくだらないことに思いを費やしてるんだらうって思ったら、パーっと軽くなったの。そしたら、あの日、はるかのこと死ぬほど嫌いになったのは、それは本当の友人愛がないからだなんて分かったの。そしたら妙にムカついて、今まで親友だと思っていた相手を、いざとなったらこれほどまでも憎める自分が悔しくて。わたし、考えさせられた。一つだけ、大人になったと思う。“自分のことしか考えてなかった。愛に欠けてたな”って。

はるか 美里、わたしこそ、ごめんね。「自分ばかりが悩んで、自分ばかりが…」って、いつも“被害者”のつもりで。

美里 はるか、わたし、あなたの歌声、好きよ。頑張ってるね。わたしの分も歌い続けてね。

はるか ありがとう。…ありがとう。

ナレーション 本当に長い間、わたしの中にわだかまっていた美里への気持ちが、吹っ切れた。それとともに、ずしりと響いてきたのは、白川マネージャーの存在。そう言えば、白川さんも時々、教会に行くって言ってたけど、今度のことも、やっぱりあのイエス様の愛だったんだ。何よりもうれしかったのは、美里が、すっかりたくましくなって、自信にあふれて、わたしのことを応援してくれること。休暇も明けて、またいつもの忙しい時がやってくる。でも、もう揺るがない。わたしの声を待ってるファンに、もっともっとステキな歌を聞かせてあげる。わたしの後続く後輩にとっても、目標となる歌手になろう。そして、いつでも自分のすべてを投げ出しても構わないと思えるほどに、周りの人たちを精一杯愛していこう——。こんな優しい気持ちにさせてくださったのは、やっぱ、神様、…なのかな？ そう、きっとそうなんだ。イエス様、ありがとう。

<完>